

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 16 日現在

機関番号：74314

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22890235

研究課題名（和文）：ナラティブアプローチによる中堅看護師への教育的支援に関する研究

研究課題名（英文）：The educational support to the proficient nurse by Narrative approach.

研究代表者

紙野 雪香（今井 雪香）（KAMINO YUKIKA (IMAI YUKIKA)）

公益財団法人田附興風会・医学研究所 第10研究部・研究員

研究者番号：10294240

研究成果の概要（和文）：

本研究は、中堅看護師が生きいきと活躍するために、自己の看護実践の意味を見出せるような対話を基盤とした教育的支援方法に取り組み、その成果を明らかにすることとした。中堅看護師たちは、(1) “私の看護実践” に意味が生まれる、(2) 主体感覚がうまれる、(3) 未来を志向する、という変容が起きていた。これらの変容は本支援の特徴である、安心して自由に語り合える場の設定、“私” の経験世界の活写の影響を大きく受けていた。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research is to clarify the result of the educational support based on the dialog which can find out the meaning of my nursing practice, in order for the proficient nurse freshly. The proficient nurse transformed, the following, (1) the meaning is born to "my nursing practice", (2) have the sense of "have done nursing practices", (3) think about my future. These transformations were greatly influenced by the place which can talk together freely in comfort and the vivid description in the experience world of "me".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	850,000	255,000	1,105,000
2011年度	350,000	105,000	455,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：基礎看護学

キーワード：看護教育、ナラティブ、中堅看護師

1. 研究開始当初の背景

中堅看護師に対する教育については、出産や育児などライフイベントが重なること、看護師としての発達度合いの個人差が大きい

時期であること、多くの葛藤を抱えていることなどが課題として挙げられ、個人のニーズを尊重し個別性に対応した教育支援が求められている。

具体的な教育支援方法のひとつとしてナラティブは注目されており、現任看護教育分野でも様々な取り組みが報告されている。概観してみると、看護師が語ることで実践をふりかえるもの、看護師の語りを質的に分析し抱える悩みを明らかにするものに代表されるように、「語る行為」と「語られた内容」のいずれかに着目したものが多い。

しかし、本来ナラティブは「語る行為」と「語られた内容」の2つの意味を含む複雑な構造をもつ。本研究では両者をダイナミックに捉え、新しい教育的支援方法の実践に取り組む。中堅看護師と研究者が「語る-聴く」という関係性をもつことで、語り手である中堅看護師に内在する主体である“私の声”を呼び覚ます。

2. 研究の目的

本研究は、次代を担う中堅看護師（現場の実務リーダーを担い、管理職に従事していない看護師）を対象に教育的支援を行う介入研究であり、次の2点を目的とする。

(1) 中堅看護師への教育的支援方法としてのナラティブ・アプローチの具体的な内容を明らかにする。

(2) 中堅看護師にナラティブ・アプローチによる教育的支援を行い、その成果と限界を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 教育的支援の方法

教育的支援は、急性期総合病院における中堅看護職者研修として位置付け、小グループで1年間実施した（3時間/回/月）。教育目的は、ナラティブ・アプローチの学習と実践によって、自己の看護実践の意味を見出し、より生きいきと活躍することとした。主な内容は、ナラティブ・アプローチの理論的背景を深める、理論的背景と自己の実践の接点について考える、自己の看護実践を活写する、自己の実践を伝えるという4ステップを基準とした。

(2) 研究対象者と方法

看護職者研修の参加者のうち同意を得られた3名の中堅看護師を本研究の対象者とした。教育的支援過程における中堅看護師のレポート等の提出物に加えて、支援中にかかる対話やメールのやりとり、中堅看護師の所属先管理者と研究者の間で交わされた中堅看護師の変容に関する対話について記述したものをデータとした。

本研究方法は、研究者自身が教育的支援者としてそのフィールドに参加していることが特徴としてあげられる。したがって本研究

で得られるデータは、中堅看護師と研究者との相互作用を含めた現実ということになる。支援の成果を分析するにあたっては、ナラティブが本質的に内包する他者性と共同性を参考に、関係性、文脈、生成された意味、変容プロセスに着目した記述をもとに分析を行った。

なお、本研究は研究代表者の所属先の研究倫理委員会にて審査し、承認を得て実施した。本研究では、教育実践者が教育対象者へ研究参加依頼をすることになる。そのため、対象者の参加が任意であること、撤回の自由およびそのことが教育評価に決して影響しないこと、参加しなくても教育は受けられること等については、特に十分な配慮をして説明し、研究のプロセスにおいて遵守した。

4. 研究成果

本教育的支援を受けた中堅看護師には、明らかに変容が起きていた。ここでは、その変容の内容および、本支援との関連について述べる。そして最後に、成果を踏まえた今後の展望について述べる。

(1) “私の看護実践”に意味が生まれそれを重視する

中堅看護師には、まず、“私の看護実践”に意味が生まれそれを重視する、という変容が起きていた。

これは、メタ水準の関心(鯨岡, 1997)が起こることに始まっていた。メタ水準の関心とは、ベッドサイドでの看護実践において、いつも患者にすでに関心を向けていることを継続・維持していることを指す。患者への関心の継続・維持により、中堅看護師は患者のちょっとした身ぶりの変化に気が付く。そこから患者にぴったり即した看護実践が生まれる。“私の看護実践”として喜びを感じ、そのことで支えられている自分自身にも気が付いている。

メタ水準の関心は「個と個」、人称性のある関係性のなかで起こる。患者を1人の“あなた”として関心を維持するとき、実践する“私”を取り戻すことが可能になり、そこに意味が生じる。“あなた”との間に起こった“私の考える看護実践”に自信をもつことで生きいきと実践できるという成果が現れていた。

(2) “私らしい看護実践像”の言語化により、主体感覚がうまれる

“私の看護実践”に意味が生まれそれを重視することに引き続き、“私らしい看護実践像”の言語化により、主体感覚がうまれていた。

これらの変容は、本支援方法の特徴である、「私の声」の回復に至る過程において、安心して自由に語り合う場が設定され、体験のディスカッションが行えることが影響していたと考える。自由に語り合う場では、語り手の経験世界に敬意を払う聞き手の姿勢が維持されていた。そこでは、何よりも語り手にとっての“意味”が最も重要視されていた。中堅看護師の語り口からは、「私のことを語っても大丈夫」という安心に始まり、「私のことを話したい、私の看護を語りたい」という気持ちが湧き立っていたことが伝わった。この感覚について、「私のやったことが立ち上がる。なんや、私、看護してるやん」と表現していた中堅看護師がいた。まさに“私の看護”を実践する主体としての感覚である。

本支援では、中堅看護師は、語った内容についてナラティブ的思考モード(Bruner J., 1986)による“私の看護実践”の活写に取り組む。自分に感じ取られたものを含んで実践を描くという作業は、実践をみえやすく、明快に、仕事の中核とするのに役立っていた。

誰かに何かを語ることは、その人をなんらかのかたちで表現することにほかならない。つまり、自分を語ることが、その人の輪郭をかたちづくっていく。そうしたやりとりのなかで、「自己」は姿をあらわし、変形され、更新されていく(野口, 2002)そのことを通して、“私の看護”を実践する主体としての感覚が着実に育まれていた。

(3) 自己の看護実践の探究を通して未来を志向する

教育的支援を継続していくうちに、自己の看護実践の探究を通して未来を志向する、という変容が中堅看護師に起きていた。

この変容は、“私の看護実践”に意味が生まれそれを重視すること、“私らしい看護実践像”の言語化により、主体感覚が育まれることを経て起きていた。

病院内研修として開催された初日、「この会は議事録の提出が必要ですか？」と研究者に問いかけた中堅看護師がいた。不要であると答えると「あーよかった」と心から安堵していた。支援を重ねていくと「この会は、研修って表現ではしっくりきませんね」「研修評価されている負担感がないんですよ。自分で評価できますよね。良くも悪くも私のもの、じんわり中からくる。会の仲間、スタッフ間で評価してもらえる感じがいい」と話すようになった。

これらの変化は、誰かによって企画され、誰かに何かを提出し評価されるものにとらえていた本支援が、誰のものでもない私の看護実践について思考するための対話空間へと変わっていることを示している。そのため、「語ったり、書いたりすることはとても大変。

ナラティブに関する文献も手ごわい。でも今後もこの会は続けたい。あれも語りたい、これも書いてみたい」と、この対話空間のなかで私の看護実践を探究し続けている自身を語っている。

別の中堅看護師は、看護師として働くようになって間もない頃の失敗談を大いに語ったことがあった。ユーモアを交えたその語りによって、対話は勢いを増した。この対話によって、公にすることのなかった“私の過去の失敗談”は、新しい意味をもつこととなった。それは“若い頃は失敗ばかりしていた私”の存在をも動かし、明らかに“今、ここにいる私”の存在にも影響を及ぼしていた。

以上のように、“今、ここで語る自分”が過去の自分と将来のなりたい自分をつなぐという現象が起こっていた。

(4) 今後の展望

看護師のキャリア形成はベッドサイドを離れることではない、直接ケアを重視する(Trish G., 2003)という立場にたつたとき、以上の成果は中堅看護師への教育的支援を超えて、自己の看護実践を重視し主体感覚をもって未来を志向するキャリア形成支援に発展可能な方法であることが示唆される。

今後は、本研究で取り組んだ教育的支援方法をもとに、中堅看護師のキャリア形成プログラムの開発につなげていく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

(1) 紙野雪香、西井久美子、内本千雅、吉井輝子、野村直樹：ナラティブって？ 看護実践における応用、看護実践の科学、査読無、2012(掲載決定)。

〔学会発表〕(計3件)

(1) 紙野雪香：ナラティブ・アプローチによる中堅看護師への教育的支援、日本保健医療行動科学会第27回大会、2012年6月、岐阜。

(2) 紙野雪香、岸あゆみ、吉井輝子：中堅看護師が生きいきと輝くためのナラティブ・アプローチの実際 - “私の声”、そしてキャリア形成へ -、第22回日本看護学教育学会学術集会、2012年8月、熊本(発表決定)。

(3) 紙野雪香、内本千雅、渡邊千登世：看護の質の可視化と向上をめざすナラティブ・アプローチの実際 - 時間が変わる、言葉がうまれる、“私”を感じる - 第16回日本看護管理学会年次大会、2012年8月、札幌(発表決定)。

〔その他〕

(1) 紙野雪香ほか3名：ナラティブって？ 看護実践における応用「私の看護実践 動く瞬

間をとらえる」、財団法人田附興風会医学研究所第10研究部公開シンポジウム、2012年3月、大阪.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

紙野 雪香(今井雪香) (KAMINO YUKIKA)

公益財団法人田附興風会・医学研究所

第10研究部・研究員

研究者番号：10294240